

小 論 文

教育学部 学校教育教員養成課程（初等教育コース・特別支援教育コース）

注 意 事 項

1. 「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
2. この冊子は表紙を除き 4 ページである。
3. 「解答始め」の合図があったら、まず、掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に横書きで記入すること。

下の文章を読んで、次の各問いに答えなさい。

問 1

本文の内容を踏まえて、「《他者の他者》としてのじぶんの存在の欠落」(下線部(a))とは何か説明しなさい。(100 字以内)

問 2

本文を読んで、教える／教えられるといった教師と生徒のあいだの関係について、あなたの考えを述べなさい。ただし、著者の主張する「たとえ一方通行的な関係であっても、自他はどこまでも相互補完的なものである」(下線部(b))に対するあなたの意見を含むこと。(600 字以上 1000 字以内)

学校から駆け出してくる幼い男の子を、母親が腕を広げて待っているという場面である。レインはこの出会いかたに四つのタイプがあるという。

- 1 彼は母親に駆け寄り、彼女にしっかり抱きつく。彼女は彼を抱き返していう。
〈お前はお母ちゃんがすき?〉。そして彼は彼女をもう一度抱きしめる。
- 2 彼は学校を駆け出す。お母さんは彼を抱きしめようと腕をひらくが、彼は少し離れて立っている。彼女はいく 〈お前はお母さんが好きでないの?〉。彼はいう 〈うん〉。〈そう、いいわ、おうちへ帰りましょう〉。
- 3 彼は学校を駆け出す。母親は彼を抱きしめようと腕をひらく。が、彼は近寄らない。彼女はいく 〈お前はお母さんが好きでないの?〉。彼はいう 〈うん〉。彼女は彼に平手打ちを一発くわせていう 〈生意気いうんじゃないよ〉。
- 4 彼は学校を駆け出す。母親は彼を抱きしめようと腕をひらく。が、彼は少し離れて近寄らない。彼女はいく 〈お前はお母さんが好きでないの?〉。彼はいう 〈うん〉。彼女はいく 〈だけどお母さんはお前がお母さんを好きなんだってこと、わかっているわ〉。そして、彼をしっかり抱きしめる。

男の子と母親との関係の四つのタイプ。以前に大学のゼミで学生たちといっしょに、これら四つの関係のなかでどれが一番いい関係か、どれが一番あぶない関係か、考えてみたことがある。最初はたいていの学生が1、4はいい関係、2はすこしあぶない関係、3はひどい関係だといっていた。ところが議論しているうちに、逆に4が一番あぶない関係、3はけっこういい関係だというふうにみんなの意見が変わってきた。それは、表面的な関係のプラス・マイナスから、二項間の関係の構造そのものに目を向け変えたからである。

1においては、母と子のふたりがたがいに相手のうちに自己を確認するという、過不足のない関係が、融合の関係がなりたっている。そのあいだに曖昧なところはすこしもない。これに対して2、3、4では、対立という否定的な関係が発生している。男の子が「〔母親から〕分離した存在」としてじぶんを主張しはじめるからである。そしてその処理のしかたが、それぞれの母親によって異なっている。

2では、今後この関係がどのように展開するかは別として、とにかく男の子は母親によって、別の存在、分離した存在として承認されている。

3では、男の子の拒絶が母親をひどく苛^{いら}立たせ、母親のさらなる対抗行為を引きずりだす。つまり、男の子と母親とは明確に分離した存在としてたがいにより強い対立関係に入りこむ。しかしこのとき男の子は、じぶんの存在がはっきりと母親という他者に影響を及ぼしている事実を肌で確認できている。

ところが4では、「母親は、彼が自分はどう感じているということに対して聞く耳を持たず、彼自身の証言を無効化する感情を彼のものだとすることによって巻き返す。このような型の属性付与は、当の〈犠牲者〉が現実だと経験する感情を、非現実的だとするのである。このような仕方では、真の背離が闇に葬られ、にせの結合がつくりだされる」。ここでは、男の子が母親とは別の存在としておそろおそろ首をもたげたとたん、「それはほんとうのおまえではない」というふうに、母親のなかで彼が占めるべき位置へと没収され、そうして母親に対する他者としての彼の位置が消去される。彼の存在が母親の解釈体系に呑^のみこまれ、分離した存在としての彼の位置が消去されるので、二人のあいだに自他という関係が発生しようがない。

(中略)

レインによれば、ひとはじぶんの行動が〈意味〉するところを他者に知らされることによって教えられる、いいかえるとじぶんの行動が他者に及ぼす〈効果〉によってじぶんが何者であるかを教えられるものであるのに、ここではこの男の子は母親によって彼女の他者として承認されない。したがって彼はじぶんにとっての他者になんの影響もあたえられない。したがって彼は、だれにもなれない。だからこの関係はあぶないのである。

わたしが〈わたし〉でありうるためには、わたしは他者の世界のなかに一つの確かな場所を占めているのでなければならない。ところが、レインによれば、この男の子がいままさに経験しているのが、《他者の他者》^(a)としてのじぶんの存在の欠落なのだ。彼はじぶんじしんを他者にとって意味あるものとして経験できないのである。母親とのこうした関係のなかで、彼は、じぶんを意識するごとに、あるいはじぶんがある感情にとらわれるごとに、それを偽りの自分、にせの感情として受けとめざるをえなくなる。

もし彼が他者とのあいだで4の関係を結びつづけるならば、彼はまさに彼じしんとなるために、架空の他者しか存在しない世界をみずからつくり上げるしかないだろう。他者のいない世界、それはしかし、母親が子どもを前にしてみずからつくり上げていた世界となんとよく似ていることか。彼はまさに母親の分身となるしかなかったのである。

(中略)

わたしたちは、他者がじぶんとは異質のものとして一定のへだたりのなかで存在しているという単純な事実直面したときも、その事実に耐えきれないで、他者をどうにかしてじぶんの理解のなかへ押し込め、じぶんの世界に同化させようとする。しかしそのようにしてわたしのまなざしの前に立つ他者は、観念化された虚構の「他」者、わたしの影にすぎない「他」者であって、わたしがいままさに直面している問題としての他者ではないだろう。他者はもはやそこには存在しないのである。

このことは、教える／教えられるといった教師と生徒のあいだの関係、あるいは看護する／看護されるといった看護者と患者のあいだの関係のように、一見一方通行的

ともみえる関係についても言える。教師も看護者も、教育や看護の現場でまさに他者へとかかわっていくのであり、そのかぎりで他者からの逆規定を受け、さらにそのかぎりで〈わたし〉のアイデンティティ^(注)を補強してもらっているはずなのである。

ところがここでも「教えてやる」「世話をしてあげる」という意識がこっそりしのびこんできて、じぶんは生徒や患者という他者たちとの関係がなくても〈わたし〉でありうるという錯覚におちいってしまう。そしてそのとき、〈わたし〉の経験から他者が遠のいていく。

たとえ一方通行的な関係であっても、自他はどこまでも相互補完的なものである。
(b) 生徒を規定しない教師はいないし、生徒に規定されない教師もいない。とすれば、「先生はほくらがいてところでもいないところでもいつも同じ態度でいる」と感じさせる立派な（つまり子どもが入る余地のない）教師に習うのと、点数をつけまちがえたり、遅刻して生徒をいらいらさせる欠点だらけの教師に習うのと、はたしてどちらが子どもにとって幸せかはかならずしも自明ではなくなる。すべてをそつなく敏速にこなす看護師さんの世話を受けるのと、注射を打ち損なったり、体温をはかるのを忘れてたりするドジな看護師さんの世話を受けるのでは、後者のほうが幸運なこともあるのである。なぜなら、そのような看護師さんは、わたしたちをたえずはらはらさせたり、怒らせたり、疑心暗鬼にしたりすることによって、じぶんを他者にとって意味あるものとして経験させてくれるからだ。

（注）じぶんらしさの自覚。

〔出典〕 鷺田清一『じぶん・この不思議な存在』（講談社現代新書、1996年）。

出題にあたり原文の一部を改変し、原文（縦書き）を横書きに、読点「、」をコンマ「,」に改め、引用した。漢字表記は、常用漢字にないものには出題者がふりがなを付した。

